

英語表現力の基盤となる思考力と判断力

一般に、言語の表現力は話し手の運用能力（話す力・書く力）によって観察することができるのに対し、言語活動における思考力と判断力のはたらきを直接観察することはできない。しかしながら、話し手がある表現を使用するときには、それが発話の場面にふさわしいという判断がなされた結果、その表現が選択されるのであり、さらにそれを組み立てるためには文法知識に基づいた思考力が必要である。また、聞き手が相手の発話の意図を的確に理解するためには、相手がなぜそのような表現を使っているのかを判断し、その発話を文法知識によって分析的に理解しなければならない（そのようなプロセスが反復練習によって最終的には自動化されるとしても）。したがって、表面上現れてくる表現力の背後には、目に見えない思考力と判断力のはたらきがあると考えることができる。

英語科における思考力・判断力・表現力の関係をこのように捉えた場合、学習上の到達目標である表現力の伸長を達成するためには、教員は次の両面に配慮する必要がある。(i) 児童・生徒の語彙的な知識を量的に増やして、使える表現のストックを豊かにしておくこと（表現力）。(ii) 思考力と判断力を質的に高めて、さまざまな表現を使いこなせるようにすること（思考力・判断力）。現在附属学校で研究を進めている「学び合い」による学習は上記の (i) (ii) の両方と関連づけることが可能であると思われるが、ここでは紙幅の都合上 (ii) の思考力と判断力に絞って、初等部と中等部に分けてその可能性を指摘したい。

平成23年度から全面的に実施される小学校外国語活動の学習指導要領では、その内容の一部として「外国語の音声やリズムなどに親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気づくこと」が挙げられている。これは「ことばへの気づき」とも呼ばれている内容であり、言語的な思考力の育成に直接・間接的に関わるものである。特に、日本語の使用に言及されている点に注目したい。音声面・単語の意味・語順など、日本語と英語の間には多くの違い（と共通点）がある。これらを意識しながら英語に触れることは、言葉に対する思考力を高め、中等部での効果的な文法知識の習得につながると考えられる（文法意識の高揚、あるいはメタ言語意識の育成）。身近な外来語等を使いながら、学び合いを通して日本語と英語の違いについて児童同士で気づいたことを交換する活動は、コミュニケーション活動に苦手意識をもつ児童にとっても有効であろう。学級担任を中心として、外国語活動と国語の授業を連携させる試みに発展させることも考えられる。今後の課題としては、学級担任・外国語活動担当教員・ALTの3者が授業のねらいを共有し、うまく役割を分担することが挙げられよう。特に学び合いの場面では、普段の児童の様子を把握している学級担任の役割が大きくなるものと思われる。

中等部では、生徒が既習の文法事項を整理し、文法知識を効果的な運用と結びつけるために、学び合い学習を活用することができるだろう。例えば、過去形と現在完了形をそれぞれ別個の知識として理解していても、両者を「時制」という枠組みの中で適切に位置づけて使い分けることができなければ、最終的な表現力には結びつかない。両者の違いを理解する段階では思考力が、実際に使用する場面では判断力が、それぞれ発揮される。このような知識の定着には、教員が規則を教える演繹的な指導よりも、生徒に規則を見つけさせる帰納的な学び合い学習の方が効果的かもしれない。附属中学校ではすでに実践例が積み上げられているが、今後の研究課題の1つとして、文法事項の整理をどのタイミングで行うのかという点が考えられる。一例を挙げれば、単純現在形と現在進行形の違いについて、現在進行形が新出事項として出てきたタイミングで考えさせるのではなく、もっと後の段階、例えば中学校3年生くらいで考えさせてもよいかも。つまり、基本的な文法知識の定着を目指す段階ではなく、さらなる探求課題を見いだして発展的な学習へと移行する段階で、学び合いによる文法規則の発見学習を活用するのである。このような学習の効果はこれまで十分に検証されているとはいえず、研究課題として十分に興味深いものであるといえよう。

（共同研究者：島根大学教育学部言語文化教育講座 縄田 裕幸）